

臨濟大師の時代と其思想

伊 藤 古 鑑

一

臨濟大師、諱は義玄、曹州南華の人である。俗姓は那氏、幼にして穎異、長じて孝を以て親に仕へ、落髮受具するに及んで深く毗尼を究め、博く經論を採られたのであるが、しかし濟世の醫方は獨り教外別傳の玄旨にあると云ふことを悟つて、終に黃檗の希運禪師に參せられ、行業純一なると三歳を経過したのである。時に會中の第一座たる睦州龍興寺陳尊宿に勧められて、黃檗の室内に投すること三度、而かも三頓の痛棒を喫して未だ照顧せず、仍つて更に提誘せられて大愚の肋下に築拳し、此處に黃檗の佛法多子無しと大悟し、爾來黃檗の會下に回つて専ら黃檗の機輪に參じ、意氣衝天の觀があつたのである。

のち黃檗の法を嗣いで郷黨に還り、鎮州の臨濟禪院に化門を開いて、四來の禪衲に接せられ、常に學侶奔湊して眞に盛觀を極めたのであるが、更に河府に去り、大名府に往き、興化寺に來つて東堂に住し、三聖慧然と末後の問答をなして、寂然と遷化せられたのである。時に唐の懿宗皇帝咸通

八年孟陬の月十日と云ふのであるが、しかし寂年に就ては異説があるので、高僧傳、編年通論、傳燈錄、佛祖通載には咸通七年と云ひ、五燈會元、聯燈會要已後の諸錄には多く咸通八年と傳へて居る、塔を大名府の西北隅に建て、澄靈と云ひ、勅して慧照禪師と諡したのである。

臨濟大師の語録は一巻あつて今なほ江湖に鳴つて居る。その機鋒の險峻なること未だ曾て見ないところで、上根上智の人に非ずんば、到底その提唱さへ許されないのであるが、しかし余輩は禪宗の思想史研究として、是非とも臨濟大師の時代と其思想の一端を窺つて見たいと思ふのである。然れども其潜越は應に死を以て價するならんも、研究は研究としてまた別箇の範圍に屬し、大に其思想發達の徑路を研究し、禪學研究の向上を圖らうと欲するのみである。

二

臨濟大師の出生年代は未詳であるけれども、入寂の年代は先づ咸通八年となつて居る。即ち西曆紀元八六七年、我が朝の清和帝貞觀九年に當り、達磨大師の入寂を去ること三百三十二年、六祖大師より是一百五十四年、南嶽より是一百二十三年、馬祖よりは七十九年、百丈よりは五十三年、黄檗よりは十七年を経過して居る、而して同時代の禪匠として有名なものは徳山宣鑑禪師であらう、徳山は西曆紀元七八〇年に出生し、八六五年に入寂せられたのであるから、八十六歳の長壽を保ち、臨濟大師の入寂よりは二年已前であるけれども、その年輩に於ては遙かに上であつたであらうと思

ふ。この兩者の宗風は克く似て居つたので、徳山の棒、臨濟の喝は共に叢林に喧しく、後世に至つて胡喝亂喝、鸚鵡蟬噪、その機鋒を眞似するものも多くなつたのであるが、兎に角この兩者は時代を同じうし、同じく棒喝を行じ、同じく諸方の宗匠を罵り、無事休歇を力説すると云ふ點に至つては良く似て居ると云はねばならぬ、而かも此の兩者が親しく相往來し商量して居たことも、臨濟錄などに依つて證明されることである。

師開第二代徳山垂示云、道得也三十棒、道不得也三十棒、師令樂普去問、道得爲什麼也三十棒、待伊打汝、接住棒送一送、看佗作麼生、普到彼如教而問、徳山便打、普接住送一送、徳山便歸方丈、普回舉似師、師云、我從來疑著這漢、雖然如是、汝還見徳山麼、普擬議、師便打。

師侍立徳山次、山云、今日困、師云、這老漢寐語作什麼、山便打、師掀倒繩床、山便休。

臨濟大師と徳山との思想の相似は聯燈會要第二十に顯はれたる徳山の廣語と、臨濟錄とを比較研究すれば一目瞭然たることで、兩者の宗匠が斯くも等しく機鋒を活用し、當時の禪僧を罵倒し、惡言麤語、口を衝いで出づるものは、その反面に其の當時の時代を物語つて居るものではなからうか、即ち其の時代は有名なる唐武の廢佛毀釋があつてから、まだ間のないことである。唐武の廢佛毀釋とは唐の武宗皇帝が神仙を好み會昌五年に至つて佛寺四萬餘を毀ち、僧尼二十六萬餘を還俗せしめたと云ふことで、これが西曆紀元八四四年に當り、我が臨濟大師の入寂より溯つて二十三年已前の

事に屬す、時恰かも師の黃檗禪師教化の時代であつて、親しくその災厄に遭はれたと云ふべきである。日本入唐の沙門たる慈覺大師の如きも此の災厄に遭はれたので、天臺も華嚴も、法相も三論も、乃至は密教の如きも殆んど全滅と云つた形であつて、唯だ僅かに禪宗のみが命脈を維持し、獨り隆々として其の勢力を復興した時代であるが、しかし此の間には天下の宗匠と自稱するものも甚だ多く、此處に龍蛇混雜の時代となつた譯である。勿論それ以前には馬祖道一、百丈懷海、黃檗希運の大宗匠あり、また石頭希遷、藥山惟儼、雲巖曇晟の大英哲が出世して門庭を開き、學人に接せられたのであるけれども、時代は混沌として其の門流と稱するもの彼此みな同じく、殊に奇を弄し怪を呈して猥りに閑家具を列ね叢林の荆棘を以て誇りとし、いよ／＼出で／＼いよ／＼邪道を行するものが天下に横行する時代となつたのである。かゝる時代に明眼の大宗匠と云はれて居る人は、臨濟大師と同時代に趙州從諗、洞山良价、潞山靈祐、仰山慧寂等の大善知識があつた、南泉、藥山、雲巖、龍潭等の如きは先輩者に屬し、曹山、雲居、雪峰、玄沙等の如きは寧ろ後輩者に屬すべき人であつたらう。此等の禪門隆昌の時代に、而かも支那四百餘州、臨濟の一喝を以て風靡し、嶄然頭角を現して、獨り禪機を活躍させた臨濟大師は、そも如何なる思想の人であつたか、これが研讀は素より其の機に非ざれば知ること能はざるも、餘輩は且らく臨濟大師の語録を拜讀して、その思想の一端を窺つて見ることにせやう。

三

臨濟大師の語録の内容は、始めに語録四十則を出し、次に勘辨二十六則を出し、次に行録二十二則を出して、最後に寶壽延沼の錄せる略傳を附して居る、即ち語録と云ふべきものには、臨濟大師の宗旨とも見るべき三玄三要、四料簡、四賓主等を載せ、勘辨には大師が諸方の老宿を參叩して、道の邪正を探究せられたる商量を掲げ、行録には大師が諸方の智識に應接したる行狀を載せたる實錄であらう。而して此の臨濟錄一卷は三聖の慧然禪師が編纂せられ、大名府の興化存拜禪師が勘校し、寶壽の延沼が筆書し、延康殿の學士馬防が序を作り、福州鼓山の宗演禪師が重開刊行せられたもので、我が國では貞享二年の刊本を最古として、數度の刊行があつたと云ふ話である。また末釋評語も非常に多いもので、近時、通俗的の講義講話も出版されたやうであるが、一般には難解で、その要旨さへも知ることが出来ない。

素より此の臨濟錄は錄中の王である、臨濟七部の書にも十部の書にも數へられ、祖道の根源に徹する爲めには、是非とも此の語録を必讀せなければならぬ、必讀と云ふても到底その宗旨は解るものではない、けれども一則讀めば一則讀んだだけの功はある、研究すべきものではなくして、大に翫索し照心すべきものであらう。余輩は今、多くの末釋に依らずして、直ちに本文を拜讀し、その間に得たる臨濟大師の思想如何を要言せば、先づ破邪顯正の二方面に依つて觀察することが出來や

うと思ふ、破邪とは對他的であつて、龍蛇混雜の時代であるから、秦鏡の活眼を開いて、來機の邪正を辨別せなければならぬ、勿論それに要する臨濟大師獨特の戰具を備へて法戰に臨み、専ら機鋒を以て爭はれたと云ふべきである、顯正とは破邪のところに必らず具して居るので、單獨に顯正と云ふべきものはないが、しかし今は臨濟大師の思想系統から論じて、その正義の那邊にあるかを考察して見やうと思ふに過ぎぬ。

先づ臨濟大師の破邪の方面から申すことにせやう、臨濟大師の時代は前述の如くに龍蛇混雜の時代であつた、惡く云へば瞎眼の賣主坊主が多かつたので、何れの時代でも法盛んなれば魔も盛んであり、實際の見性もせず唯だ大風呂敷を引げ、我れは天下の大宗匠なりと誇稱し、所謂禪天魔の外道が少なくなかつたものであらう。それに對する臨濟大師の破邪的態度は極めて峻烈なもので、或は喝し或は打し、三玄三要、四料簡等の葛藤を施設して門庭を開き、大に學人の應接に力められたと云ふ譯である。而して此等の葛藤は盡く宗旨上の運用であつて、臨濟の四喝も四賓主も、畢竟するに閑家具ではあらうけれども、また其處に臨濟の臨濟たる真面目が突出して居る、悲しいかな余輩はこれに對する説明の智識を持たぬ、唯だ臨濟大師の破邪的態度を取られた語を引文せんに、先づ臨濟大師が最も大聲叱呼、その怒眼睛をむき出して、今なほ其の風丰を拜するが如く思はるゝものは左の一句であらう。

道流、夫大善知識、始敢毀佛毀祖、是非天下、排斥三藏教、罵辱諸小兒、向五逆順中覓人、所以我於十二年中、求一箇業性、如芥子許不可得、若似新婦子禪師、便即怕趁出院、不與飯喫、不安不樂、自古先輩到處人不信、被遞出始知是貴、若到處人盡肯、堪作什麼、師子一吼、野于腦裂。

臨濟大師の肚裏より吐き出されたる一句、これを獅子吼と云はすして何と名けやう、眞に大善知識と稱するものゝ一句は、その當時の新婦子の禪師をして腦裂させたであらう。臨濟大師の前に臨濟大師なく、臨濟大師の後に臨濟大師なし、這の一箇の臨濟大師のみが宇宙に彌淪し、法界周遍して居る。その口裏より打出する言句の險峻なることは、有らゆるものを許さない。佛を呵し祖を呵し、その當時の善知識を罵倒して、少しも容るゝところがない。佛に對しては、

道流、若道佛是究竟緣什麼、八十年後、向拘尸羅城雙林樹間、側臥而死去、佛今何在、明知與我生死不別、爾言三十二相、八十種好是佛、轉輪聖王應是如來、明知是幻化。

と云ひ、また一般の佛菩薩等乃至經教に對しては、

道流、莫將佛爲究竟、我見猶如廁孔、菩薩羅漢、盡是枷鎖、縛人底物、所以文殊仗劒殺於瞿曇、奪掘持刀害於釋氏。

道流、取山僧見處、坐斷報化佛頭、十地滿心、猶如客作兒、等妙二覺、擔伽鎖漢、羅漢辟支、猶如廁穢、菩提涅槃、如繫驢橛。

三乘十二分教、皆是拭不淨故紙、佛是幻化身、祖是老比丘、爾還是娘生已否。

と云ひ、更に諸方の宗匠に對しては、

有一般不識好惡禿奴、即指東劃西、好晴好雨、好燈籠露柱、爾看眉毛有幾莖、這箇具機緣、學人不曾、便即心狂、如是之流、總是野狐精魅魍魎、被四他好學人、咬噬微笑、言「瞎老禿奴、惑亂他天下人」と云ひ、到るところに諸方の宗匠を破するに、禿子、瞎禿子、無眼人、瞎屢生、禿屢生、瞎老師、禿奴、老禿奴等の惡言麤語を列ねて、有らゆる方面より罵倒し盡されたのであるが、然らば何故に臨濟大師は此の如きの態度を取られたであらうか、それは其の當時の時代を物語ると同時に、また臨濟大師の宗風をも窺ひ知ることが出来るので、この宗風の成立や一朝一夕にあらず、この思想の徑路を更に研究することにせやう。

四

次に臨濟大師の顯正の方面を述べるならば、別に顯正と云ふて破邪と離す必要はない、破邪的態度のところに顯正はある。然らば臨濟大師が邪と云ひ正と云はるゝものは如何なるものであらうか。臨濟大師は常に眞正の見解と申されて居る。眞正の見解さへあれば他一切を顧みない、百本の經論を解するの要なし、國王大臣を取らず、辯懸河に似たるを取らず、聰明智慧を取らず、唯だく眞正の見解のみを要すと云はれて居るが、此の眞正の見解とは如何なるものであらうか、先づ眞正の

見解を得んとするには如何なる方法を取つたならば良いであらうかと云ふに、臨濟大師は信の一字を高く唱道し、信不及の者を深く教誡して居られる。即ち信とは自を信することである、自の現今用ゆる底を深く信することである。

道流、是爾目前用底、與祖佛不別、祇麼不信、便向外求、莫錯、向外無法、內亦不可得、爾取山僧口裏語、不如休歇無事去。

但能息念、更莫外求、物來即照、但爾信現今用底、一箇事也無。

山僧指示人處、祇要爾不受人惑、要用使用、更莫遲疑、如今學者、不得病在甚麼、病在不自信處、爾若自信不及、即忙忙地、徇一切境、轉被他萬境回換、不得自由、爾若能歇得念念馳求心、便與祖佛不別、爾欲得識祖佛麼、祇爾面前聽法底是。

と云はれて極めて懇切な教誡であるが、要するに深く自を信じ、外に向つて求むるの念を息めなければならぬ。徒らに佛を求むれば佛魔に攝せられ、徒らに祖を求むれば祖魔に攝せらるゝので、求心は盡く魔である、求心の爲めに其の身を縛し其の心の自由を奪はれるので、先づ第一に馳求心を去つて、即今目前、孤明歷々地に、汝自心を見徹せなければならぬ。その見徹した境界は三世に通貫し、十方を該羅した心王自在のところである。

入一切境差別、不能回換、一剎那間、透入法界、逢佛說佛、逢祖說祖、逢羅漢說羅漢、逢餓鬼說

餓鬼、向一切處、游履國土、教化衆生、未曾離一念、隨處清淨、光透十方、萬法一如。

と、實に眞正の見解の境界である。隨處清淨光と云ひ、隨處爲主と云ひ、立處皆眞と云ひ、共に臨濟大師の有名な語であつて、これが萬法一如の當體である。金剛經の如は不動であり、一切の經教の眞如であり實相であるが、しかし眞正の見解は決して名句上に向つて解を生じてはならぬ、説を下してはならない、他の凡聖の名に礙へられ、他の表顯の句に執着して、道眼を晦ましてはならぬ。祇如十二分教、皆是表顯之說、學者不會、便向表顯名句上生解、皆是依倚、落在因果、未免三界生死、爾若欲得生死去住脫著自由、卽今識取聽法底人、無形無相、無根無本、無住處活潑々地。

と云ふ、更に活潑々地の境界を到るところに明されて居るが、その根柢は一箇の無事底であるやうに思ふ。修あり證ありと執するのではない、佛を求め法を求めるのではない、看經看教も亦是れ造業であつて、佛と祖師とは是れ無事の人と申されて居るが、この無事は世間普通に用ひらるゝ無事とは意味が違ふ、生死煩惱を超脱して、佛界魔界に遊戲する上の境界で、閑不徹の無事である。甞拍者、無孔笛、閑古錘とも云ふべき超脱した境界であつて、尋常一樣的無事ではない、大に有事底の無事である。臨濟大師も無事は貴人、但莫造作、祇是平常と云ひ、或は佛法無用功處、祇是平常無事と申されて居る。卽ち功勳修行造作のないところ、こゝに任運無功用の妙行あり、大に修行して而かも修行せざるに同じと云ふ境界、春の花、秋の月、溪流の潺々たる、閑雲の徂徠する、鳥の空

を飛ぶ、魚の淵に躍る、是れ皆無功用の妙處である、平生無事の端的である、無事と云へば外界の束縛を受けんことである、忙閑兩境、人事百般の中に入出して、而かも終始無事底である、人惑を受けず、法惑を蒙らず、良く隨處に主と作り、立處に真となるので、これを無事底の貴人と申したのである。寶藏論にも唯道無事、古今常貴、唯道無心、萬物圓備、故道無相、無形無事、無意無心と云ひ、宗鏡錄には此の意を受けて、夫有事則爲相局、無事則心地坦然、卽古今同而貴と申して、迥然獨脫、脫體現成、一切時一切處に於て、物と拘はらぬと云ふところ、そこに臨濟大師の顯正の態度は躍如として居る。

夫如眞學道人、並不取佛、不取菩薩羅漢、不取三界殊勝、迥然獨脫、不與物拘。

と云はれて居るが、實に此の不與物拘の四字が字眼である。物と拘はらずして一切時一切處に、不疑の道力を活躍させなければならぬ。臨濟大師も此の乾坤が倒覆するも我は更に疑はず、十方の諸佛が一時に現前するとも喜ばず、三塗の地獄が目前に頓現しても怖れないと云はれて居る。これを要するに不與物拘の境界で、その間に外境を有相と執して、取捨分別する念がない。聖を愛せず、凡を憎まず、三塗地獄に入つても園觀に遊ぶが如く、餓鬼畜生に入つても報を受けない。何となれば臨濟大師には更に嫌ふ底の法がない、眞佛無形、眞道無體、眞法無相と云ふのが臨濟大師の肚裏ではなからうか。

五

已上に於て臨濟大師の思想の大略を述べたが、更に此の思想は如何なる徑路に依つて、斯くも圓熟の境界に入つたものであらうか、少しく臨濟大師已前の禪學思想より研究すれば、先づ初祖已前の思想は且らく問はず。初祖已後に於て初祖には少室六門集あり三祖には信心銘あり、四祖には禪宗論あり、五祖には最上乘論あり、六祖には法寶壇經ありと申して居るが、しかし少室六門集は初祖の眞撰にあらず、何人か初祖に託して禪を説くと云ふに過ぎぬ。信心銘は三祖の眞撰と傳ふれど、その説は餘りに禪味を帶ばず。その當時の思想たる寶誌の大乗讚、傳翕の心王銘と殆んど同一であつて、深信不二、萬法一如の教旨を述べたものと見ることが出来る。禪宗論に至つては存否未だ聞かず、最上乘論も極めて議論多く、信賴することは出来ない、法寶壇經は六祖の眞撰なれど、まゝ後人の挿入多く、初學者は心して研究せなければならぬ、けれども此の書已外に依るべきものはないので、恐らくは初祖大師已後、全く禪の思想として、その基礎を作り上げたものは六祖大師であると云はねばなるまい。六祖大師の思想を一言にして覆へば本來無一物の五字に盡きるので、その思想の根源は金剛經の應無所住、而生其心に發して居るやうに思ふ、而して其の心は自の本心である、思量分別の念想ではない、この心は虚空の如く廣大無邊であつて、總べての相對を絶して居る。

心量廣大、猶如虛空、無有邊畔、亦無方圓大小、亦非青黃赤白、亦無上下長短、亦無墮無喜、無是無非、無善無惡、無有頭尾、諸佛刹土、盡同虛空、世人妙性本空、無有一法可得、自性真空、亦復如是。

と云ひ、更に此の絶對の心性を明むるを以て成佛の端的となし、法寶壇經の到るところに見性成佛の深旨を示されて居る。

無上菩提、須得言下識自本心、見自本性、不生不滅、於一切時中、念念自見、萬法無滯、一真一切真、萬境自如如、如如之心即是眞實、若如是見、即是無上菩提之自性也。

と云ひ、更に凡夫即佛とか、煩惱即菩提とか、本來の面目とか云へる有名なる語は、盡く此の法寶壇經に顯はれて居るので、この書が如何に重要な地位を占めて居るかは充分に知ることが出来る。

六祖大師已後に於ては、その門下に南嶽の懷讓、青原の行思、荷澤の神會、永嘉の玄覺、南陽の慧忠の五大宗匠出で、殊に南嶽と青原とは各々一家をなし、その兒孫は今に至りて絶へないのである。南嶽の駿足に馬祖大師が出で、この思想は六祖大師と大差なく、常に即心即佛を高唱し、禪機の峻峭、良く變に應じて種々なる作略を用ひ、棒を行じ喝を行じ、堅拂も盡く馬祖大師に淵源して居ることは注意せなければならぬ。その高弟に百丈禪師出で、その禪機の縱横なることは師に譲らず、殊に禪刹を開創し、規矩を整頓して、祖庭の獨立を計られたことは特筆すべきことであ

らう。その法嗣に黃檗禪師が出で、その大機大用は、その當時の帝王宰相をして師事せしめ、有らゆる禪匠をして顔色なからしめ、大唐國裏に禪師なし、盡く是れ墮酒糟の漢と絶叫せられた其の見識の高邁なることは、實に天成の禪匠と云はなければならぬ。その思想は師と同じく、無染無著を宗となし無求無得を必要とせられて居る。殊に黃檗禪師の思想が、その資の臨濟大師に影響して居ることは最も注意すべきことで、今その一二を例證として左に要文を掲げることとせやう。

その一心に對する語は良く六祖大師に似て、而かも一心の成佛を説き、外に求むる勿れと云へるは、臨濟大師と同じ思想である。即ち黃檗禪師の傳心法要に、

諸佛與一切衆生、唯是一心、更無別法、此心無始已來、不曾生、不曾滅、不青不黃、無形無相、不屬有無、不計新舊、非長非短、非大非小、超過一切限量名言蹤跡對待、當體便是動念即乖、猶如虛空無有邊際、不可測度、唯此一心即是佛、佛與衆生、更無別異、但是衆生、著相外求、求之轉失と云ひ、臨濟大師は此の一心の成佛を巧みに説いて、

爾一念心上清淨光、是爾屋裏法身佛、爾一念心上無分別光、是爾屋裏報身佛、爾一念心上無差別光、是爾屋裏化身佛、此三種身、是爾即今目前聽法底人、祇爲不向外馳求、有此功用。

と云ひ、自心が活文殊である、眞の普賢である、觀音三昧法であると示されて居るが、黃檗禪師にも、文殊當理、普賢當行と云ひ、觀音當大慈、勢至當大智と云ひ、更に續けて、

人皆有之、不離一心、悟之卽是、今學道人、不向自心中悟、乃於心外、著相取境、皆與道背。

と結ばれて居る。この意味は既に六祖大師も、自性迷卽是衆生、自性覺卽佛、慈悲卽是觀音、喜捨名爲勢至等と云はれ、唯心の彌陀、己身の淨土なることを明されて居るが、この傳心法要も臨濟大師の思想も、共に是れが中核となつて顯はれ、心外に向つて佛を求むる勿れ、法を求むる勿れ、自の一心が卽ち佛なり法なり。而かも此の一心は求心歇んで無事となつたところを云ひ、これを六祖大師は無念と云ひ、黃檗禪師は無心と呼び、臨濟大師は無事と名けられたまでである。傳心法要に、恒河沙者、佛說是沙、諸佛菩薩、釋梵諸天、步履而過、沙亦不喜、牛羊蟲蟻、踐踏而行、沙亦不怒、珍寶馨香、沙亦不貪、糞尿臭穢、沙亦不惡、此心卽無心之心、離一切相、衆生諸佛、更無差別、但能無心、便是究竟。

と申されて居るが、この思想と臨濟大師の思想とは、如何にも良く似て居るではないか。黃檗禪師の無心も單なる無心ではない、大に有心底の無心である。六祖大師も亦無心を説かれたが、決して單なる無心ではなかつた。卽ち法寶壇經には無念を説いて、若百物不思、當令念絕、卽是法縛、卽名邊見と云はれ、無とは二相なきを云ひ、念とは自の本性を念すること、種々なる分別妄想の休歇したところを云ふのであらう。要するに此等の思想は盡く黃檗禪師にも顯はれ、臨濟大師にも顯はれ、共に一貫した思想のやうに思ふ。

かくの如く臨濟大師の思想の徑路は、六祖大師に端を發し、馬祖大師百丈禪師の大機大用を稟け、黃檗禪師の高邁なる識見の下に百鍊千鍛、臨濟破夏の因縁に依つて始めて道眼明白となり、此處に邪正を分別せらるゝやうになつて、その時代に適した教化を施設せられたものではなからうか。

(大正十五年九月三十日稿)